

# 迷走台風からスギ花粉症

## 〜ヒトが創り出した現代の環境〜

ジャーナリスト

三木寛郎

### 今や国民病となった

#### スギ花粉症

因するものようで、東京湾に沖繩の魚グルクンが息をするようになるなど、世界温暖化の影響は着実に身近に近づいてきているようだ。

そこでふと思いついたのだが、

2024年8月22日(木) 午前3時にマリアナで発生した台風10号(Shanshan)は、超巨大台風とやらの前評判で鉄道など交通機関に大きな影響を与え、大雨による災害を引き起こし、前例のないような迷走の末に消えていった。想定外の動きは気象予報を翻弄し、日々の天気予報は大混乱となった。聞くところによれば、あの予測のつかない軌跡は、亜熱帯における台風のそれとよく似ているようで、どうやら連日の猛暑に晒された日本の夏は、亜熱帯性気候に類するものとなり、それに連れて台風もフラフラと彷徨する仕儀となったのだ。

猛暑の続く日々や迷走する台風は、昨今騒がれている気候変動に起

1970年頃から急速に増加した花粉症も、現代の人類を翻弄する新たな脅威のひとつと言えるかもしれない。花粉症の割合は、計測方法によって異なるが、医師の診断を受けた人の割合で3割ぐらいとされ、花粉症の症状を自覚し自己申告している人は5割とも言われる。

ちなみに、2019年の厚生労働省の調査では「正確なところは分かっていない」という前提ながら、スギ花粉症で38・8%と発表されている。つまり約4割がスギ花粉症に罹っていることになるわけで、2008年の調査では26・5%だったので10年で患者数は約1・5倍に増えたことになる。

春先になるとコロナとは別の意味でマスク姿が目立つようになるのは、昨今の日本におけるの風物詩のひとつとなりつつあるのではないだろうか。

英語では hay fever (枯草熱) と名付けられた花粉症。その起源には諸説あり、一説によれば古代ギリシャの医師ヒポクラテスが花粉症と思われる病気について言及しているとの話もあるが、現代社会でアレルギー症としては1960年代から激増しているというのが定説となっている。

日本で最初の花粉症は1961年というが、いずれにしても花粉に対するアレルギー症状としての花粉症が急増したのは1960年代以降である。

そもそも花粉症とは、花粉によって引き起こされるアレルギー症状のことで、くしゃみ、鼻水、鼻づま

り、目のかゆみ、のどの痛みなどの症状があり、花粉が飛散する時期にだけ症状が現れるため、季節性アレルギー性鼻炎とも呼ばれている。例に挙げたスギ花粉症以外にも、欧米で19世紀後半に発見されたブタクサがあり、さらにカモガヤ・カナムグラー・ヨモギなどに起因するものがあるという。

終戦直後、荒廃した国土を復興させるために木材の需要を増やすことが必要であり、特にスギは、ヒノキなどと違って育つスピードが速いということから、国策として植林が奨励された。そのせいか、人工林のなかでスギは最も多く、その面積は日本の国土面積の約15%、人工林の約44%、454万ヘクタールにも及ぶそうである。戦後の復興期に植林がされ、1960年以降、植林されたスギがちょうど花粉をつくる林年齢に達していることは、花粉症増加の

大きな原因と考えられている。さらに外国産の木材が大量に輸入されるようになり、日本の杉林の管理がおろそかにされ、間伐や下草刈りが十分に行われないことでスギ林が病み、大量の花粉を発生させているという一面もあるように考えるのは筆者だけだろうか。ついでながら、沖縄と北海道にはスギがほとんどなく、少なくともスギ花粉症の人は皆無であるという。

一方、ハウスダスト・ダニアレルギー（通年性アレルギー性鼻炎）というものもあり、文字通り一年中アレルギー性鼻炎の症状が出ている人も少なくない。その原因は家のホコリやダニのフンや死骸で、ペットのフケやカビも通年性アレルギー性鼻炎の原因となるそうである。

### なぜ花粉症は急増した

花粉症急増の原因には、大気汚染の影響も挙げられている。花粉が大気中の化学物質と付着した結果、アレルギー反応を引き起こしやすくなったとする説である。花粉症を引き起こすのは、花粉に含まれるアレゲン物質で、花粉が衝撃を受けて

破裂する際に放出されるという。大気中の化学物質と接触した花粉は、破裂しやすく、大気汚染によって汚れた花粉が破裂し、アレゲンを放出するのが花粉症を急増させる原因と考えられているのだ。

また、日本人の体質変化も花粉症急増の原因と考えられている。日本の食生活は、戦後の高度成長期を経て大きく変化した。高たんぱく、高脂質の欧米型の食生活は、アレルギーを引き起こしやすいとされている。高度成長期を経た日本では、花粉症のみならずアトピー性皮膚炎など他のアレルギーも増加している。さらに日本人を取り巻く環境が石油中心の社会に変わった時期と花粉症が急増する時期は奇妙に一致している。石油化学工業が発達してプラスチックなどさまざまな新素材が世の中に登場し、ガソリンで走る自動車も劇的に台数を増やした。ちなみに、1970年ごろのガソリンエンジン車が発生させた有害物質は、現在のその10000倍もあつたとする説もあるほどだ。

さらに奇妙な一致を見せているのが、20世紀の最大の発明とされてい

る抗生物質の登場である。

1928年に英国のフレミングが、アオカビから細菌を強力に殺す物質であるペニシリンを発見。その後10年以上を経て同じ英国のフローリーとチェーンが再発見し、1942年にアメリカに渡って製品化に成功した。

日本へは第2次世界大戦末期の1943年12月にドイツから潜水艦が日本に到着し、その積み荷にドイツの医学雑誌があつたのだ。当時の陸軍の軍医がその論文を読み、翌年の1944年の2月にペニシリンの研究を開始し、なんと同年の11月にはペニシリンの開発に成功している。日本は世界で3番目のペニシリン開発国になったのだ。

これほど多くの人の命を救った薬はないが、すべての薬は薬効の反面、有害な側面を持ち合わせていることも事実である。

その大きなマイナスの側面が腸内細菌の減少である。ヒトの腸内には100兆個、重さにして体重の3%程度の腸内細菌があり、そのすべては最近まで解明されていなかった。近年、遺伝子解析の進歩で明らかに

なり、この腸内細菌が抗生剤の影響を受けて、大きく変わることが分かってきたのである。

アレルギーは抗生物質が腸内フローラを攪乱することでも起こるとされている。1950年以降に生まれた、ほぼすべての人類は抗生物質を処方されており、そこから「アレルギー体質」になった人は、たまたま運が悪かっただけなのかもしれないが、花粉症と同様に、アトピー性皮膚炎などのアレルギー症状も、戦後になって急速に増えていることも確かである。すべてのアレルギーは1950年代に抗生物質が使われるようになる前は、ほとんどなかったというのだ。

戦後からの高度成長期、日本人の食生活は欧米にならって豊かになり、そして抗生物質の投与も増えてきている。花粉症の増加は、日本古来の自然環境と、現代の日本人が上手く調和がとれていないことの表れかもしれないのだ。

温暖化だけでなく、人類は自身身を取り巻く環境にもういちどしっかりと目を向けるべき時期に来ているような気がしてならない。